

漂泊するアイデンティティと台湾の文化

——台湾で考えたこと、台湾を考えるということ——

三 須 祐 介*

0. はじめに

台湾の人々が「台湾人」であることを意識し表明すること。この一見自明のように思えることが実は容易ならざる現実として台湾にはある。「中国はひとつである」という政治的虚構によって支えられてきた中華人民共和国と中華民国との間の微妙なバランス関係が、その背景の一つとしてあることは事実である。しかし台湾の人々が「中華民国」に疑義なく自己同一化できるかといえば、これもそう簡単ではない。2011年、台湾は「中華民国百年」の「国家」的節目の年を迎え、ある種の祝祭的気分が広がっている。しかし『破報』はこれに異議を唱える形で、「誰にとっての「百年」か？誰にとっての「民国」か？」という特集記事を組んだ。記者はこの百年の歴史の中で台湾という土地に生きてきた市井の人々にインタビューした上で、台湾に生きる人々の自己同一性がいかに構築的であるか、ということに思い至るのである。この百年という時間幅で言えば、台湾を植民地としていた日本が彼らの自己同一性に一定の影響を与えていたことから目を背けることはできない。ここでは、揺れ動き漂泊する台湾の人々のアイデンティティと、漂泊を余儀なくされる台湾という島の周縁性と文化、ということに焦点を当てて考えてみることにしたい。

1. 「台湾」をめぐるアイデンティティ・ポリティクス

まず台湾の歴史を簡単に振り返っておきたい。元来先住民（オーストロネシア系）が在住していたこの島に16世紀以降、中国福建や広東から漢族の移住が始まる。台湾が世界史の中で注目され始めるのは、1624年に始まるオランダ東インド会社による統治からであろう。オランダ支配は1661年、鄭成功の攻撃によって幕を閉じるが、鄭氏時代は22年間とオランダ時代よりも短く、まもなく清朝の版図に組み入れられる(1683年)。それから約200年後、日清戦争後の下関条約によって台湾は日本に割譲されることになり(1895年)、日本統治時代は1945年まで50年間続く。日本の敗戦で「光復」した台湾には中華民国政府軍が進駐し、実質的な台湾統治を進めるが、国民党政府の独占と腐敗はやがて台湾の人々の反発をうみ、1947年に二・二八事件が起きる。同じ漢人とはいえ戦後大陸から移ってきた外省人と元々台湾に住んでいた本省人との亀裂はここに決定的となり、戒嚴令の施行(1949年)に象徴される国民党の一方支配など、長くその影響は続いていくことになる。この状況は1987年の戒嚴令解除に伴って緩和し、2000年には民進党政権が発足するに至った。

このように簡単に歴史を遡るだけでも、台湾が一貫して外来政権のもとにあったことが分かる。つまりあるべき「台湾の歴史」も、時々の

* 広島経済大学経済学部准教授

政権の主体が紡ぐ虚構の歴史の一部として組み込まれていたことは容易に想像できる。台湾においては「台湾の歴史」すら自明のものとして語り得ない時代が長く続いていたのである。

そのような意味で、戒厳令の解除は、「台湾の歴史」を新たに紡ぐ可能性を開いたともいえるのである。しかし、歴史学者の周婉窈(2009)が、これまで大きな歴史の影で見えてこなかったエスニックグループやマイノリティグループ全てに配慮した新しい台湾史を書くことは可能なのか、と自問していることにも表れているように、「歴史の主体」は誰なのか、という問題もまた喚起されることになった。これは、台湾の人々にとって「自分とは何か」という問題がつねに現前していること、自己同一性が揺らいでいることと無関係ではない。次節以降では、「漂泊」を切り口に、学術や文学(文化)におけるアイデンティティの表象について考えてみたい。

2. 「中央研究院」の過去と現在 —漂泊の来歴—

中国大陸の研究書や論文などにおいて、中央研究院はしばしば“中央研究院”と引用符号付きで示されることがある。1928年、中華民国国民政府肝煎りで設置された極めて政治性の強い最高学術機関としての中央研究院は、中華人民共和国にとって今でも形式的には敵性機関なのであり、引用符号が付けられるのも頷ける。ただし現在の中国大陸にある中国科学院と中国社会科学院という国家的シンクタンクは、中央研究院をその前身としており、中央研究院という基盤の上に成立したことも付け加えておかねばならない。

さて、南京国民政府が成立するのとほぼ同時に成立した中央研究院は、蔡元培を院長として、日中戦争前には10の研究所を上海、北京(北平)、広州などに擁していたが、日中戦争勃発後は、戦火を逃れて重慶、昆明、桂林など内陸部

への西遷を余儀なくされた。中央研究院は大陸時代に既に漂泊の運命を背負っていたのである。日本敗戦後に続く国共内戦で敗れた国民党政府は台湾へ撤退するが、中央研究院が抱える多くの研究所のうち、歴史語言研究所と数学研究所のみが辛うじて遷台を果たすことができた。1953年には現在の台北市南港地区に用地を購入し、胡適院長をはじめとする多くの人々の尽力で、現在の規模(準備中も含め約30の研究所)へと発展している。

総統府直属の機関である中央研究院は、国民党政府との深い関わりを持つだけでなく、上述のような漂泊の来歴を参照すれば、本来的に「中国」を強く意識した研究機関であることは確かである。「台湾」はあくまで仮の居所なのであり、「台湾」はあくまでも「中国」の一部であるという意識が底流として潜在しているのではないだろうか。たとえば、筆者が一年間滞在した中国文哲研究所は、その名のとおり中国伝統文化の精髓を研究することを目的としている。具体的には文学(明清・近現代)、哲学、経学が中心的な研究対象である。また、「台湾」文学研究もなされているが、形式的には「中国」文学研究の「部分」として包摂されている。台湾文学研究所が存在しないことにもよく表れているが、「台湾」文学はあくまでも「中国」の一地方文学という扱いに過ぎないのである。

ここではイデオロギー的側面をことさらに強調したいわけではない。むしろ現在の台湾における最高学術機関として中央研究院は尊重されており、中国をはじめとして多くの国の研究者が集う場でもある。より多様な視点やイデオロギーが共存していることにも注意を向ける必要がある。中央研究院に本来的に潜在するイデオロギーも、台湾人アイデンティティを形成する要素の一部として存在しているということなのである。

3. 台湾の近代文学と漂泊—白先勇を例に—

*台湾における（近代）文学の流れ

前節では、「台湾文学」が、形式的にとはいえ「中国文学」の一部に組み込まれている状況を述べた。台湾人の主体意識を考えると、やはり文学という表象は看過できない重要性を孕んでいると言えよう。ここでは、近代における台湾文学の流れを簡単に振り返っておきたい。

日本統治期においてはまず、頼和（1894—1943）らによる活動を挙げねばなるまい。頼和は1920年前後に大陸で起こった五四文化革命への共鳴を示し、言文一致体の新文学（魯迅、胡適）を台湾に紹介し、また自ら創作も行ったりした。しかし、言語の差異、日本統治期という背景もあって受容は難しく、大きな潮流とはならなかった。この時期はまた、台湾人の日本語による創作も注目に値する。代表的な作家と作品には、楊逵「新聞配達夫」（1934）、龍瑛宗「パパイヤのある街」（1937）などがある。40年代になると、皇民化政策のもとイデオロギー色の強い「皇民文学」が生み出されていった。

戦後、国民党政府の統治が始まると一転、日本語創作が禁じられるようになった。それまで台湾の文筆活動を担ってきた台湾知識人は中国語ができず、まさに「自らの言語」を奪われてしまったのである。替わって登場したのが中国語のできる外省人作家たちで、彼らがものしたのは国民党のプロパガンダともいえる50年代の「反共郷愁文学」であった。

「反共郷愁文学」に代表される過度に強調された官許の中国伝統文化への批判と、西欧近代文学の受容を旨としていわゆるモダニズム文学が登場するのは60年代のことである。これは白先勇を中心とする台湾大学の学生らによって創刊された雑誌『現代文学』が根拠地となった。一方で同じ60年代には台湾帰属意識とモダニズム批判を掲げて雑誌『文学季刊』も創刊されたが、

後の白先勇の述懐によれば、当時の「モダニズム」は「郷土」と離れがたく結びついたものであり、これらの動きは台湾人意識（暮らす土地への愛着）が戦後台湾で幼少期を送った若い世代に共有化された結果だという。70年代初頭になると、米中国交回復などの国際事件が、「中華民国」の虚構性をますます浮き彫りにし、台湾本土を意識した「郷土文学」がより注目されるようになった。これら60年代以降の文学の流れが台湾主体意識（本土意識）の反映した80年代以降の「台湾文学」の萌芽になったと言われている。

ここで研究対象としての「台湾文学」を考えてみたい。「台湾文学」が中心的に研究されるにはそのための学術機関が整うことが重要だが、台湾初の台湾文学系（系＝学部）が淡水学院（現真理大学）に設置されたのは1997年、国立大学では成功大学に台湾文学研究所（研究所＝大学院）の修士課程が設置されたのが2000年、博士課程は2002年である。台湾大学はさらに遅れて2004年にやっと台湾文学研究所が発足している。ここ十数年でこの動きは一気に広がったが、遅きに失した感否めない。中央研究院における台湾文学研究の例からも容易に推察されるが、台湾主体意識を如実に反映する「台湾文学」だからこそ、政治的な要因によって正面から扱われることはなかったといえるだろう。

*白先勇と「台北人シリーズ」

ここでは上述した白先勇（1937—）とその作品について述べる。白先勇は中国の広西省生まれ、父親は国民党政府の政治家で高級軍人である白崇禧である。そのため日中戦争期、国共内戦期は大陸各地や香港を転々とする。1952年に台湾へ移住、成功大学水利工程系を経て台湾大学外文系（英国文学）に転学し、1960年には歐陽子、王文興らとともに雑誌『現代文学』を創刊した。1962年にはアイオワ大学に留学し、後、

米国で創作活動する傍らカリフォルニア大学サンタバーバラ校で長く教鞭も執った。『現代文学』でモダニズムを標榜したことからも分かるように、カフカやフォークナーなどの強い影響を受ける一方で、崑曲に代表される中国伝統文化にも愛着を持っていることが知られている。代表作に『孽子』(1984)や「台北人シリーズ」などがある。

「台北人シリーズ」は1965-71年に発表され、1971年に小説集『台北人』として刊行されている。全14作品の「台北人シリーズ」は、山口守(2008)が指摘するように、いわゆる外省人を描くことで郷土から離れざるを得なかった「エグザイルとしての喪失感」が鮮明に描かれ、彼らが「過去の記憶を引き摺って生きる(或いは死ぬ)六〇年代」を中心的に、大陸における民国史と戦後台湾史、過去の大陸の都市と現在の台北を行き来する重層的な時空間を表現した作品といえる。

ここでは、そのなかの一つ、「遊園驚夢」(初出『現代文学』第30期、1966年)を取り上げてみる。舞台は1960年前後の台北の高級住宅街、天母の竇邸である。内容は以下の通りである。台湾南部に住まう銭夫人は久々に台北にやってくる友人と旧交を温める。集まったのはかつて南京の得月台という劇場で鳴らした役者たち、その後名士の妻や妾となって台湾に渡ってきた。彼らは大陸時代の芝居の話などをめぐり談笑し、酒食を楽しむ。やがてかつての舞台姉妹たちが芸を披露していく。銭夫人は崑曲の『遊園驚夢』をうたうように促されるが、酔いが回り始めたのか他の客がうたっている間に意識が混濁して、かつての記憶が不規則に現れては消えていく。銭夫人は結局うたうことなく、宴はお開きとなり、客たちは帰路につく。

この作品のポイントは三点ある。一点目は、大陸から台湾への離散が描かれているということである。中国的アイコンに彩られた屋敷の調度

品は、台湾にありながら中国への郷愁で満ちているといえよう。二点目は、抑圧される女性という表象である。役者と名士の妻妾は、ともに喝采の対象になる身分とはいえ、元来蔑視の対象であった伝統劇役者も身分違いの結婚で得た妻の座も、抑圧される女性性の表象であることに変わりはない。華やかな一面があるからこそ、負の側面も浮き彫りにされるのである。三点目は、タイトルにもなっている「遊園驚夢」が持つ中国伝統文化の表象と不可視化されたセクシュアルなイメージである。「遊園驚夢」は明代の劇作家・湯顯祖の代表作『牡丹亭還魂記』の一部である。梗概は以下の通りである。美貌の杜麗娘がある日花園でうたた寝していると夢に柳の枝をもった青年と出会い契りを交わす。杜麗娘は青年への恋煩いで自画像を残して死ぬ。柳夢梅は科挙を受けるため都へ行く途中病にかり梅花庵で養生する。そこには杜麗娘の自画像があって毎晩柳の夢に杜麗娘が現れるようになり、柳は彼女を愛するようになる。庵のそばを掘ると棺が見つかり、杜麗娘が生き返る。杜の父ははじめ結婚を許さないが、柳は科挙に合格し、結局皇帝によって結婚が許される。「遊園驚夢」は冒頭の杜麗娘と青年の夢の中での契りの場面だが、小説の中でそのセクシュアルなイメージは、銭夫人のとぎれとぎれの記憶の中に新たに現出される。この場面は「意識の流れ」を援用しており、白先勇のモダニズム文学へのこだわりをも示している。

実はこの小説は、白先勇本人によって舞台劇(新劇)の脚本として書き直されており、戒嚴令解除前の1982年に初演されている。そして2011年1月に「民国百年」イベントの一環として再演されたのである。この作品が中華民国に自己同一化できるはずの「外省人」を扱っている点で、「民国百年」の一環であることに明らかな違和感はない。しかしそのような「民国百年」の政治イベントとしてこの作品を消費し、「外省人

を描く大中国主義の作品」というレッテルを貼ることに慎重にならなければならないだろう。戒厳令解除前の初演時とは明らかに社会的政治的情況に変化が生じている。エグザイルとしての外省人はもはや台湾人にとっての「他者」ではなく、そのなかに含まれる少数者として認識されているのである。この作品はいわば「台湾文学」の経典として台湾の歴史をリアルに描いているといえるだろう。

4. 戒厳令解除(1987)後の社会運動と文化 —周縁からの視線—

最後に戒厳令解除後における台湾の社会と文化について「マイノリティ」の視点からまとめておく。戒厳令解除後の社会運動の勃興は、それまで抑圧されていた社会的弱者(マイノリティ)の解放を目指すものであった。たとえば先住民、女性、セクシュアル・マイノリティがそれぞれの声を発するようになったのである。

とりわけ女性運動から派生したセクシュアル・マイノリティ解放運動は、90年代に「同志文学」の隆盛を現出させた。「同志」とはゲイ、レズビアン、トランスジェンダーなどマイノリティである非異性愛者を指す。実は、エグザイルである外省人として、外省人の悲哀を描いてきた白先勇は、90年代の「同志文学」を準備したともいえる作品をも書いている。例えばそれは「台北人シリーズ」のなかの「満点に輝く星」(原題「滿天裡亮晶晶的星星」, 1969)や長編『孽子』などである。「同志文学」は性的なアイデンティティの揺らぎや不確定さと向きあう作品群といえるが、台湾においてこのような作品が隆盛した背景とは一体何なのか。

それを考える上で「周縁」というキーワードは有効だろう。周知のとおり国際政治学的な地図の上で台湾は周縁的な位置に存在している。そのことが彼らのアイデンティティ形成に重大な影響を与えていることも確かであろう。しか

しその周縁性は決して弱さのみを表象してはいない。周縁へと単に追いやられて終わるのではなく、周縁性を積極的に自ら引き受けることでそれを強靱なエネルギーにかえようとする姿勢が、台湾の文化を下支えしていると言えるのではないか。それは例えば、欧米におけるセクシュアル・マイノリティが、元来蔑称であった「クィア(変態)」を自ら名乗ることによって、すべての既成概念にひびを入れるクィア・セオリーを手に入れたことと相似をなしているのである。

5. おわりに

これまで述べてきたように、台湾における複雑な歴史は、そのまま個人のアイデンティティ形成に影響を与えている。台湾はいままさに自らの歴史を歩み始め、ひとりひとりがその歴史の多様な主体であることを自覚し始めているのである。その多様性こそが台湾における文化をより豊穡にしているのだろう。国際政治学的に周縁に置かれた台湾だからこそ、周縁にあることにむしろ積極的に向きあっており、それが社会的弱者(マイノリティ)に力を与え、多様なあり方と共存する道を歩んでいる。

一方で、台湾の複雑な歴史のなかには「日本」や「日本人」が投げ込まれていることも忘れることはできない。台湾を考えること、台湾で考えることとは、とりもなおさず「自分自身」を考えることに他ならないのである。

主要参考文献

- *日本語
- 河口和也『クィア・スタディーズ』岩波書店, 2003年
- 朱 偉誠/山口 守訳「父なる中国, 母(クィア)なる台湾?—同志白先勇のファミリーロマンスと国家想像」『クィア/酷児評論集』台湾セクシュアル・マイノリティ文学[4], 作品社, 2009年
- 白 先勇/陳 正醒訳『孽子』国書刊行会, 2006年
- 白 先勇/山口 守訳『台北人』国書刊行会, 2008年
- 松永正義『台湾文学のおもしろさ』研文出版, 2006年
- 山口 守編『講座 台湾文学』国書刊行会, 2003年

若林正文『台湾—変容し躊躇するアイデンティティ』
ちくま新書, 2001年

* 中国語

『白先勇文集』1-5, 花城出版社(広州), 2000年
潘 光哲『何妨是書生 一個現代學術社群的故事』広

西師範大学出版社, 2010年
宋 佩玉「在學術獨立與政治滲入之間—蔡元培與中央
研究院」『學術界』142期, 2010年
周 婉窈『台湾歴史図説 増訂本』聯経出版, 2009年
『破報』(台北)2010年12月31日号, 2011年1月7日号